

皆さん、こんにちは。第 3 回目のテストが終わりホッとしている人が多いかと思います。この後、前期の成績が確定し成績票が担任の先生から配られますので、それに一喜一憂するだけではなく、後期に向けてどのように勉強していくか、反省すべきところは反省し勉強方法の見直しを含めて、後期に向けて頑張っていきましょう。

夏休み前、担任の先生から「進路の手引き」が配布されました。その最初のページに私が担任を持っていた時の経験を記しました。「夢」を持ち、それに近づこうと努力すれば必ず夢は実現するんだという主旨でした。今日は担任としての経験ではなく、サッカー部顧問として関わった一人の少年、といっても今年 35 歳になるのですが、彼の話をしてみたいと思います。

現在、長野県でサッカーに携わる人にとって、聖地と言えば「アルウィン」ということになるでしょうか。現在、松本山雅の本拠地となっている球技場ですが、聖地というだけのこともあって、誰もがアルウィンで簡単にプレーすることはできません。高校生の場合、高校サッカー選手権大会の長野県大会準決勝・決勝の 3 試合しかチャンスはないのですから。

このアルウィンですが、平成 13 年（2001 年）の完成ということで、その歴史は非常に浅いのですが、全国どこるか海外の球技場をも参考にしていますので、観戦のしやすさという点においては全国屈指となっています。その年、県内のある高校でサッカー部を指導していた私は、選手の頑張りに助けられて準決勝・決勝の 2 試合をアルウィンで経験することができました。選手のみならず、指導者にとっても聖地ですから真新しい芝の上に立った時は鳥肌が立つほどでした。

残念ながら決勝で敗れ全国出場は叶いませんでしたが、その時の 3 年生 26 人の中には大学に進んでからもサッカーを続け、最終的にはプロになった選手もいました。指導者となって、現在地元の指導者になった人もいます。でも、多くは高校まででサッカーを止めて会社員になったり起業をしたりして、家庭を持っている人がほとんどです。

高校まででサッカーを止めた中に一人、珍しい職業に就いた人がいます。名前は宮島秀一。実は、後にプロになった選手とは違った魅力が彼にはありましたので、私は大学でサッカーをやってみるのもいいのではないかと勧めていました。ポジションは F W、体格がよくジャンプした際の滞空時間が長いため、ヘディングの競り合いについては県内で負けることはほとんどありませんでした。また、大きな選手は足元の技術に欠けるきらいがありますが、非常に柔らかなタッチでボールコントロールができていました。大事なゲームでも点を取ってくれました。

しかし、彼が選んだ道はサッカーではありませんでした。選手権決勝で負けた後、

大学への進学も考えたようですが、自分が本当にやりたいものは何かを考え内なる自分と向き合った結果、「人に大きな感動を与えられるような仕事」「時代に流されず脈々と技術が伝承される職人」になろうと考えたと言います。しかし、職人と言っても幅は広い。その中から花火師を選んだのは小さい頃に自宅から遠くに見た花火の印象だったと言います。夜空に大輪を咲かせ人々を感動させる仕事。花火を見上げる人たちから感嘆の声が上がる大きな仕事。そんな仕事をしてみたい。花火師になってみたい。これが彼の人生を決めたのです。

といっても簡単に花火師になれるわけではありません。だいたい、煙火店から求人票なんてものは高校に来ません。どこに煙火店があるか、また受け入れてくれるのか、まずはそこから始めなければなりません。そして熱意です。何としてでも花火師になるんだという強い気持ち。それが実って高校卒業後に花火師に、いや煙火店への弟子入りが決定したのです。

今年の9月2日付信濃毎日新聞に諏訪湖の新作花火大会の様子がカラー刷りで出ていましたが、皆さんはその写真を見たでしょうか(下図1)。その大会で彼は敢闘賞を取りました。高校卒業後17年の間、努力を積み重ね、大きな大きなタイトルを取るまでになったのです。私は早速電話をし、お祝いと労いの言葉を伝えたのですが、せっかくなので松本市にある彼の仕事場まで行って花火の作り方をを見せてもらう約束をしました。私自身、花火製造工程を見るのは初めてのことでしたので、火薬玉が徐々に大きくなり、それらを半球状の入れ物に詰め込んでいく作業に目が釘付けとなりました。最終工程は火薬玉で一杯になった半球ふたつを合わせます。どんな色がどんなタイミングで出るか全て計算してありますので、半球を一気に合わせるのに非常に気を遣います。このように丁寧かつ繊細な仕事の上に、夜空の大輪が咲くようになっているのです。(下図2～4)。

さて、本日のまとめです。皆さん、高校卒業後は何になろうかと決めてそれに沿った形で勉強をしたり準備をしたりしますよね。でも今日紹介した宮島君のように、人に感動を与えられる仕事に就きたい、そういう人物になりたいというところから将来を考えることもあっていいかもしれません。激動の時代です。あと10年、20年したら自分の就いた仕事がなくなってしまうかもしれません。その時に拠って立てるのがあれば道に迷うこともないでしょう。「こういう人間になって、こんな形で社会に関わっていきたい」と確固たるものをもってこの天白台を巣立って行ってほしいと思います。

小幡 正樹

図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6

